

VII. 協同的探究学習を用いて主体的に探究する生徒を育てる

doi: 10.18999/bulsea.64.27

第1章

協同的探究学習を用いた授業実践

今村 敦 司

(1) 仮説

既存の教科とSS課題研究に「協同的探究学習」を取り入れることで、現代的な課題の本質について、他者と協同しながら主体的に探究し続けることのできる生徒を育成できるという仮説を立てた。

理解・思考型学習である協同的探究学習は「わかる学力」を育成するのに適した方法である。課題研究に取り入れることで、因果関係について自分の考えで説明する力や、課題の本質を理解し、多元的・長期的に考える力を育成することができる。既存教科で身につけた各教科内の「わかる学力」と、SS課題研究の中で身につけた教科横断型の「わかる学力」の相乗効果により、主体的な学びへと生徒が変化し、理解・思考・表現力が高まると考えた。

ドリル演習などで決まった解法を暗記することで身につけた学力（「できる学力」）だけでは、問題の本質を理解することができない。本校では、このような「できる学力」に対して、既有知識を使い、他者と協同しながら問題解決に向かうことで本質をつかむ力を「わかる学力」と呼んでいる。「できる学力」「わかる学力」という概念規定や「協同的探究学習」の理念は、藤村宣之教授（東京大学大学院教育学研究科）によるものである。

(2) 実践

各教員が場面に応じて個人で実践するだけで、1ヶ月に数回東京大学大学院教育学研究科の藤村宣之先生に来ていただいて授業検討および授業観察と振り返りも行っている。

SS課題研究のSTEAM（3-2-4で紹介）では、生徒が決めた研究テーマを研究していく訳であるが、それぞれの研究を進めるだけでなく、グループ内発表や「自然と科学」「生活と科学」「心身と科学」「創造と科学」という4つの領域に分かれて協同的探究学習を行った。また、本質を理解し、多面的に物事を理解しようとする態度を教科の授業でも育成するために様々な教科でも協同的探究学習を取り入れた授業を行った。

授業展開としては、個別探究→集団による探究→再度の個別探究という流れとなる。“生徒がお互いの考えを

聞き、その共通点や相違点を考えながら、知識を関連づけることで理解を深める”という学習過程を用意することが協同的探究学習の本質である。実践の詳細は、SS課題研究については3-2-4で、各教科の取り組みについては、3-6-2で紹介する。

(3) 評価

協同的探究学習は、生徒の既有知識を使って様々な考え方のできる発問を教師が用意し、生徒が主体的に自分の考えを形成することを促す授業である。優れた発問が要求されたり、全体討論では、教師が生徒につかませたい本質に迫る展開を方向付ける必要があったりする点で、ある程度の経験を積む必要もある学習法である。様々な教員が何度も観察を受け、経験を積むことができた。

協同的探究学習は、友人の探究方法を参考にして自分の考えを再考・修正できる。課題研究においては、自分の研究を客観視する力と批判的に考える力を身につけることができる。しかし、生徒の記述をどのように評価し、フィードバックしてその後の考え方に生かすという点では、なかなかその効果を生徒に実感させることができていることが課題である。（文責 今村敦司）